Disease Dissemination in the Early Modern World Connecting East and West　Ann Jannetta

は、ピッツバーグ大学歴史学部準教授で、かつて酒井教授の指導で研究した成果を基にしての執筆である。十七世紀後期の西洋とアジア共に都市化による人口集中と海上・陸上交通の飛躍的発達による西洋及び近隣諸国との交渉により、伝染病の広域化をもたらしたとの主張を文化史的視点で論述している。

Causal Theories of Beriberi during the Early Meiji Period: The Early Formation of a Network around the Theory of Beriberi being an Infection　Christian Oberländer

東大医学部研究員でもあった人で、脚気学説の変転と社会問題化を明治初期の位相でとらえて要領よく論述している。

末尾に酒井教授の略歴、業績目録が附されてあり、日本を代表する医史学者としての多岐にわたる研究のほぼ全貌を知ることができる。退任後の一層の活躍を期待したい。

充実した記念論文集であり、医史学研究の文化史的視点での取組みの指針ともなりうる著作でもある。

（蒲原　宏）

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二―七、電話〇七五―七五一―一七八一、二〇〇一年五月十一日、A五判、四三九頁、本体八五〇〇円〕

瀧澤　利行　著

『養生の楽しみ』

「江戸時代には様々な養生論・養生法が書かれた。これらを手際よく紹介して先人に学ぶとともに、私達の「養生」のあるべき姿を考える。」と本書の表紙の見返しに書かれているように、読後には「養生」に関する一通りの知識が身に付いたような、嬉しい気分にさせてくれる書である。

主として江戸時代の後期の養生書に依りながら、日本の江戸時代の養生思想を紹介しているのだが、まず改めて感心するのは、「養生」の思想が日々の生活のあらゆる側面をカバーしているという事実である。本書が導いてくれるテーマは、章ごとに食べ物や運動、性生活、温泉、呼吸法、睡眠、医者の選び方など様々で、いずれも卑近なことがらである。にもかかわらず博学の著者の案内によって、江戸時代だけではなく時には古代中国へ、時には現代日本へと次から次へと時間と空間を越境して話が広がっていく。頁を繰りつつ知的興味は尽きない。

たとえば呼吸法。神仙術の呼吸に関する養生法である「調息」について、中国の道家思想や禅家の「数息観」、これらを江戸時代の養生家がどう取り入れているか、的確に古今内外の文献を引きながら紹介する。だが本書の面白さはそれだけではない。

「まず、息の吸い方、吐き方は神仙術の吐納法と同じく大き

く悠々と吐き、また吸う。ただし、数息観の名に示されているように、こうした呼吸の回数を数えるのである。吐いて吸って一回と数えるわけである。」「私達が行うと最初は息苦しくなってしまう。だが、少し慣れてくると自分でもわかるぐらいに呼吸の感覚が長くなってくる。又、回数も最初は十回もしないで気が散ってしまうが、これも次第に回数が増してくる。こうなると気分が非常に落ち着き、心なしか疲労が安らぐ。正座してやってもよいが、仰臥して行ってもよい。」というように、実践的な文章まで時々あらわれて、本書を読みながら書斎でちょっと調息を試みてしまうのは私だけだろうか。もちろん本書は実践書ではないのだが。

軽妙な文章につられて一気に読み進むが、長年養生書の研究に研鑽を積まれてきた著者なだけに、終章に近づくにつれ、「養生」が単なる実学ではなく、よりよく生きるための一つの思想でもあったことを、懇切に説いて重みを増す。江戸時代の日本人が自己の身体と向き合うとき、単なる肉体ではなく、精神性と深くつながるものとして凝視してきたことを今更ながら納得させられる。

なお本書は対象を研究者でなく一般読者に想定しているため、基本用語の説明もたいへん丁寧でわかりやすい。「養生」に関心のある方だけではなく、医学史研究一般の入門書としてもお勧めする。

（鈴木　則子）

〔大修館書店、千代田区神田錦町三―二四、電話〇三―三二九五―六二三一、平成十三年六月一日、B六判、一九七頁、本体一六〇〇円〕

川原　秀城　著

『毒薬は口に苦し』

今回図らずも川原秀城東大教授の『毒薬は口に苦し』の書評を求められる栄に浴したので思いつくまま述べることにした。

本書を見て第一に、中国本草書の歴史が、『神農本草経』から始まり、明の李時珍の『本草綱目』が現われるまで、本草書の大まかな内容、分類、システムの構築が一貫してあり、しかも道教の影響が強くあったことを知ることができる。

また、筆者が言っているように記述に当って専門書、研究書のような固苦しさをさけ、平易に誰でも批評できるよう心掛けたという。

この二点をとっても評者は本書を評価し、紹介の労をいとわないのである。

さて、本書はA五判、三〇六頁からなり、そのサブタイトルは「中国の文人と不老不死」となっている。

「良薬は口に苦し」とはよく言われているが、古代中国では毒薬も良薬もともに同じ意味に使われていて、毒薬にはプラス（良薬）とマイナス（生命を脅かす薬物）との両面を持っ